



→河畔の木が大きくなって堤防の上から渡し舟が見えづらくなった。

←矢切畑にキジのペアがいた。右がオス、左で振り返るのがメス。これから巣作りが始まるのだろうか？



台風なみの春の嵐が一週間に二度もあつた珍しい週だった。

そのくせ風がおさまると、なにごともなかったかのように、翌日は風もやみ、からりと晴れる。

そんな週だったが舟頭さんは、

「オレさあ、攘夷になりそうだよ」

いきなりそんな不穏な会話から一週間が始まった。

十日、火曜日の夜、舟頭さんは矢切の渡しが終わってからロックコンサートを聴くために渋谷に出かけた。

「渋谷は外人であふれてるんだよ。それも、和服を着て写真を撮ってる。あれって、いったい何なんだよ。よっぽどこれは攘夷だなと思ったもんだ」

舟頭さんはいう。あれは日本人がアメリカに行ってカウボーイのかっこうをして写真を撮るようなものなのだろうか。

「まさかあ、それはないんじゃないのかなあ。日本人がカウボーイの格好をするなって聞いたことがないよ」

さすがの私もそれはないのでないだろうかといった。

今週のクマ

→クマは暑い日はベンチの下にもぐり込んで暑さをしのぐのが癖だ。



→矢切の特産品のネギも終わった。取り残しのネギ坊主が畑にひとつ。収穫の終わった畑にはこれから春キャベツが植えられる。



ヨーロッパに行ってお姫様のドレスを着て写真を撮る話なら聞いたことがあるが、さすがにアメリカでは聞いたことがない。ましてインディアンの格好というものもない。

どちらにしても「攘夷」とは穏やかではない。幕末に、はねっかえりの侍たちが外国人たちを追い払おうとしてとった行動だ。ところが徳川幕府を倒して自分たちが天下をとると、主張を引っ込めて外国人を受け入れる。

それがよかったのだが、江戸から明治に変わって、わずかのあいだに日本は変わった。日清戦争に勝ち、日露戦争にも勝つ。攘夷をしなかったおかげだ。

舟頭さんのいうように、たしかに東京を歩くと外国人が目につく。私もひさしぶりに東京に出て浅草周辺を歩いたが、浅草寺に続く仲店通りなどは、ちよつとしたラッシュアワーのように外国人が行き交っていた。

特に多いのが中国や台湾、韓国などの観光客が多かったが、やはり目につくのは西洋人だ。はっきりと外見が違うからだろうか？ いまや、東京はすっかり他人の町になってしまった。